

会 議 録

会議名 (審議会等名)		第 5 回相模原市学校給食あり方検討委員会				
事務局 (担当課)		学校給食課 電話 0 4 2 - 8 5 1 - 3 2 3 6 (直通)				
開催日時		令和 5 年 1 月 2 5 日 (水) 1 8 時 0 0 分 ~ 2 0 時 0 0 分				
開催場所		オンライン (Web) と対面 (現地) の同時開催 (現地会場: 相模原市役所本庁舎 第 2 別館 3 階 第 3 委員会室)				
出席者	委員	1 0 人 (別紙のとおり)				
	その他	1 人 (学校教育課長)				
	事務局	7 人 (学校給食・規模適正化担当部長、学校給食課長、他 5 人)				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	0 人
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
会議次第		1 開会 2 議題 全員喫食の環境を活用した食育の方向性について 3 その他 4 閉会				

1 開会

事務局から出席委員の人数が定足数に達していることを確認し、会議成立の報告をした。

2 議題：全員喫食の環境を活用した食育の方向性について

事務局より、資料に基づいて説明を行った。

(佐藤(陽)委員) 22名の栄養教諭が配置されているが、その小・中学校への配置内訳を教えてほしい。

(事務局) 小学校と給食センターに配置しており、中学校には栄養教諭の配置がない。

(角田委員) P10「令和3年度食に関する指導の実施状況」について、食育に関する指導を全く行っていない中学校はあるか。

(事務局) 全く食育を行っていない学校はない。全ての学校において実施している。

(松谷委員) P13のイメージにある「食に関する指導の強化充実」について、具体的にはどのようなことを想定しているのか。

(事務局) 本日の資料はあくまでもイメージであり、今後の作業をしていく内容を分かりやすく示したものである。委員の皆様の食に対する、あるいは、給食運営に対する思いや考えをお聞かせいただきたいと考えている。出していたいただいた意見を集約し、次回検討委員会で提案させていただきたい。

(大澤委員) 栄養教諭の今後の配置・採用計画について決まっていることはあるか。

(事務局) 教職員全体の定数計画もある中で大幅に増やすことは難しいと思われる。現段階で決定していることはない。

(川崎委員長) P10の「栄養教諭や栄養職員と連携した授業や活動」とは具体的にどのような活動や授業を実施しているのか。

(学校教育課長) 給食の内容に触れながら、栄養について指導している。また、食育プロジェクトがあり、そこで作成した動画を給食時間に流して、食に対しての感謝を高めるといった活動も行っている。

(緒方委員) 「栄養教諭や栄養職員と連携した授業や活動」で、栄養教諭や栄養職員が中学校に行くというのが6校というのはとても少ないと感じるが、何か理由があるのか。

(事務局) 授業として食育指導が実施されたものが6校であり、数としては十分な活動ではないとは考えている。ただ、食育の授業方法については、各学校で工夫して、授業計画が詰まっている中で捻出し実施している状況である。

(緒方委員) これは全クラスで行われているのか。1クラスでも行われていればP10の数に入っているのか。

- (事務局) その通りである。1クラスでも実施していれば数に入れている。
- (大澤委員) 実際に現状では食育にどのくらいの時間が確保されているのか。
中学校は大変忙しいと思うので、どれくらい時間が取れるのか加味した上で意見を述べていく方がいいと思った。
- (学校教育課長) 食育という教育課程がないので、年間で何時間という把握はできないというのが現状である。
- (佐藤(由)委員) 小学校の例で申し上げると、家庭科・保健・社会科・学級活動などの教科の中で関連して食育を行っているのが現状である。
- (川崎委員長) 教科の中で「食育」だけを実施するのは難しいと思う。教科の中で食育を絡めることや給食時間に動画を流すことが現実的な話になると思う。そのコンテンツについてはこの委員会の中で議論した方がいいと思う。
- (藤原委員) P10の表で「地場産物を活用した食に関する指導」5校と、「学校給食における地場産物の活用」5校は被っている感じがするが、センター校ということなのか。
- (事務局) 「地場産物を活用した食に関する指導」は教科等における食に関する指導で、「学校給食における地場産物の活用」は給食の時間における食に関する指導になるので、実施した時間帯が違う例になる。
- (緒方委員) 「給食の時間における指導」は、誰が指導しているのか。
- (事務局) 指導については各学校に給食担当という職員も配置している。また、栄養教諭が関わっている場合もある。動画配信については、もともと栄養教諭等で動画を作成して、それを各学校へ配信するという形式で行われている。作成の段階で栄養教諭が関わりながら、実際の活用は各学校でしている。
- (緒方委員) 地場産物の活用についても同様の体制か。
- (事務局) 地場産物の活用についても給食担当の職員が中心となって指導している。
- (川崎委員長) 食育の実施に関する相模原市の課題はどのようなものが考えられるか。
- (事務局) 食育指導の実施時間数が少なく、教育現場として時間を割くことが難しいのが現実である。栄養教諭の配置が小学校中心となっており、中学校に即した食育を充実させるところまで至っていないという状況である。
- (川崎委員長) 食育指導の時間を特別に確保するのは難しいと思われる。給食時間などに活用できるコンテンツが必要だと思う。栄養教諭の活用についても、人数を増やすことは難しいと思われるので、現状の人数を活用しながら、コンテンツを作っていく必要があると思う。

(堤副委員長) 栄養教諭の数がすぐには増やせないのが、現在いる栄養職員を活用してということだが、栄養教諭と栄養職員では業務内容が違うので、栄養職員を栄養教諭として任用替えすることを検討してはどうか。そのようにすれば、やる気やモチベーションも上がると思う。また、中学校は給食センターが主体なので、給食センターから中学校に出向いて食育ができるプログラムを今後構築していく必要があるのではないかと思う。

(川崎委員長) 任用替えとは、こういったものなのか。

(堤副委員長) 学校栄養職員として採用されても、途中から栄養教諭に職務替えをするということである。

(川崎委員長) 事務局はこの意見に対して考えはあるか。

(事務局) 市の教育委員会の中では、栄養に関する職員は、栄養教諭、管理栄養士、栄養士と職種がいくつかある。その内で教諭とするのは栄養教諭である。教諭でない栄養職の者が教諭に任用替えをした事例は相模原市でも実施されたことがあり、そのような提案だと認識している。

(堤副委員長) 栄養職員が栄養教諭にということなのだが、栄養教諭の資格を持っている者が学校での採用枠がないので、まずは栄養職員として採用され、欠員が出れば、栄養教諭の資格があるので任用替えで栄養教諭になれるということである。管理栄養士や栄養士だけの資格の方は栄養教諭の欠員があったからといって、任用替えはできない。

(事務局) 補足の説明をいただき、ありがとうございました。

この委員会での議論をお願いしたいのは、まず、食育をどういうふうにしていくべきか、何をしていくべきかの意見である。その次の段階で、そのための方向論としてどうしていくのかということを考えている。まずは食育をどうしていくべきなのか、そこについて委員の話をいただきたいと考えている。

(佐藤(由)委員) 栄養教諭が配置されている小学校では、栄養教諭が1人で授業を受け持つことができる。栄養士は担任等と連携して実施する形となる。中学校では、栄養職員と家庭科等の教員が連携を取って進めていくことが大事になってくるのではないかと思う。

(川崎委員長) 現状は食育として何を教えているのか。

(学校教育課長) 給食に使われている材料の栄養素やその効果、地場産物の調理方法、食習慣に関する内容も含まれている。

(川崎委員長) P6の「心身の健康」「食品を選択する能力」が中心で、他のところはやや手薄になっているということによろしいか。

(佐藤(由)委員) おそらく食育として意識しているかどうかの違いだと思う。「感謝の心」は道徳、「食文化」は社会科などで実施しており、網羅できていると思う。「食育」として体系づけて各教科で行っているかどうかの違いが学校ごとにあるのかもしれない。

(堤副委員長) すでに色々なことが実施されているが食育として意識して実施する、体系づけるというのが大事なのではないか。これまで実施してきた内容も位置づけを明確にしておけば、各教職員が自分の授業との関わりも認識しながら一丸となって食育に取り組むことができると思う。「食育の体系化」も全員喫食の環境を活用した食育の方向性として挙げてよいと思った。

(川崎委員長) いろいろな教科が関係しあい、食育として特別に時間を割くということではなく、食を通じて理解を深めていくということが指導の内容や食育の方向性の柱になってくると思う。

(篠田委員) 社会性というところで、ここ数年コロナ禍で子どもたちは話さず食べているだけという状態が続いていることは気になっている。食事のマナーや人間関係の構築能力を身につけることについても取り入れていただきたい。

(緒方委員) P10について食育に関する授業を実施して、どんな効果があったかという評価はしてきたのか。また、今後の評価を実施する考えはあるか。

(事務局) 食育については各学校で年間食育計画を立てることになっている。年度末にその評価結果を、県へ報告するという仕組みになっている。市として体系立てて全体の評価をする仕組みにはなっていない。

(緒方委員) 例えば、栄養教諭が実際に授業を行った学校では残食が減少した等、結果との繋がりを見ることができればいいと思った。例えばグリンピースを児童が自分でむいた学校は残食が少ない等、効果が出ている例もあるので、運用を考えてみても良いのではないか。

(川崎委員長) 最終答申をまとめるにあたって、方針の柱をたてるということなので、委員皆さまからご発言をいただきたい。

(大澤委員) 給食を通して指導するというのは、毎日食に関わる機会があるということなので、毎日少しずつ繰り返し学んで、実際に身に着けられるようなコンテンツや環境を整えるのが大切だと思う。センター方式で食育を行う場合のメリットは、コンテンツを作ってしまうとみんなが利用できることだが、デメリットは、栄養士がいない状況で各校で指導するということになるので、ベースがなくても気軽に使用できるコンテンツが必要になると思った。また、給食時間を利用して指導するというのを考

えた際、給食時間が短いと、食べるだけで食育どころではないと思うので、時間割も含めて検討しないといけないと思う。

(緒方委員) 食育を充実させるには栄養教諭や栄養職員を増やしてほしいのが正直なところである。食育担当課は健康増進課だと思うので、その職員は入ることはないのか。もし大丈夫な日があれば一緒に考えていけたら良いのではないかと。相模原市がどのような食育を求めているのか私たちもとても聞きたい。以前メールで事務局へお願いしたが、委員の中に食育の担当の先生がいるのでお話を聞きたい。それを聞いたうえでまた、さらにお話しできることも増えてくると思う。それと同じように、栄養教諭が先生達に授業等を行うことによって、先生が自分のクラスに返していくということもできると思う。全員喫食になったら先生達が一番負担に思うと思う。先生に対しても教育する必要があるのではないかと。

(佐藤(由)委員) 最終的には、子どもたちに望ましい食生活を身に付けて実践できる能力を身につけてほしいと考えている。食文化は各家庭で次世代に続く文化でありとても大事だと思う。自分の健康、精神面も含めて望ましい食生活を自分のために自ら実践できるように育てて欲しい。

(佐藤(陽)委員) 自分の教員時代を振り返り、教育は社会や政治の流れに大きく影響されるものだと感じている。すでに市立学校で実施していることを整理すれば、食育に関する取組事項として体系立てられるのではないかと。また、先行研究校を設定して、そこでの実践結果を全校に還元する形も有用ではないかと考える。

(篠田委員) 子どもに「小学校の時の思い出は」と聞くと「給食がおいしかった」と答える。このことから給食の指導がすごくよく、栄養教諭の指導の賜物だと思っている。ところが中学生になると給食の思い出は語らなくなった。中学生は勉強が忙しくなり、給食は一息つく場所になるのではないかと。親の立場からは、食を楽しみ、体力がつくものを食べる、そして思い出づくりにもなるような環境をつくってほしいという思いである。

(堤副委員長) 栄養教諭の数を増やすのはやはり大事だと思う。川崎市が中学校給食を開始する時に大幅に職員の募集があった。相模原市もその時が増員をするよいチャンスではないかと考えている。また、教職員に対する教育プログラムも大切である。担任等が、フードロス問題や丁寧な盛り付け等について折に触れて毎日の給食の中で言い続けることで積み上げていくことが大切だと思う。自然と身に付けられるような食育ができたらよいと思う。

(角田委員) 佐藤(陽)委員の意見、身近なところから始める、今やっていることの整理整頓、モデル校という動かし方の流れに賛同である。内容としては、「給食だより」を読んでいると、大人でも知らない内容は多い。中学校でも発行している学校はあったが、このような取り組みは有効だと思う。また、地場食材を使ってほしい。身近なところで取れた食材を食べることは非常に勉強になるし、知識もつく。

食事の重要性の中で、楽しさというのは向かい合って食べることだと思うので、早くそうなると良いと感じる。

(藤原委員) 現状、中学校は全員喫食ではないので、その日のメニューがわからないまま喫食していることもある。しかし、全員喫食になれば、メニューを周知することで、外国のメニューも共有しながら知識として身につけることができる。中学生になると、献立を作成し栄養素を学ぶようになる。全員喫食であれば、その日の献立を用いて、円グラフなどで、もしこの嫌いな野菜を食べなかったら、こんな風に必要な栄養素が欠けてしまうということも理解させることができる。それなら一口でも食べてみようかなという風に行動変容も促せる。子どもたちだけでなく先生方も一緒に学んでいけるような環境が必要だと思った。

また、給食センターでどこまでできるかわからないが、胃ろう食やペースト食などの対応もお願いしたい。共生社会を給食からでも意識してできることだと思うので、実現していただきたい。

(松谷委員) 中学生は心身の成長が伸び盛りなので、学校給食でみんなと同じものを、会話を楽しみながら食べるのが生徒の楽しみにつながると思う。中学生になると判断能力も身についてくるので、食品を選択する能力が心身の健康につながることも大事である。最後に、これから中学校給食の全員喫食がスタートすると、学校職員の負担がすごく増えていくと思うので、先生方の意見も聞いてみたい。

(川崎委員長) 経済学の観点からは、資源配分の話になるだろうと考えている。時間や予算が限られている中で、時間や人を増やすには、他に何を減らすかということになる。今ある資源をいかに有効に活用できるのかということが重要な問題ではないか。

また、教科との連携はかなり大事だと考えている。実際に先ほど佐藤(由)委員からも学校ではすでに実施しているという御発言があった。食育は五感を使って学ぶ良い機会だと思うので、必ずしも地産地消にこだわらなくても例えば、この野菜の有名な産地はどこか等は教科で教えることだと思うが、給食では教科で習ったことを味覚と連携

づけることができる。教科との結び付きをうまく取り入れることで、相模原版の新しい食育になるのではないか。栄養教諭でなくても、社会科や家庭科の先生からでも、教育の中で食を通して学んでもらうというのがよいのではないかと考えている。

3 その他について

特になし

4 閉会

以 上

相模原市学校給食あり方検討委員会 委員名簿

	氏名	所属等	備考	出欠席
1	えもり かつひろ 江森 克弘	相模原市立弥栄中学校長		欠席
2	おおさわ あやこ 大澤 絢子	神奈川工科大学健康医療科学部 准教授		出席 (オンライン)
3	おがた ゆみ 緒方 祐美	公募委員		出席 (対面)
4	かわさき かずやす 川崎 一泰	中央大学総合政策学部 教授	委員長	出席 (オンライン)
5	さとう ゆき 佐藤 由起	相模原市立若草小学校長		出席 (対面)
6	さとう よういち 佐藤 陽一	東海大学ティーチングクオリフィ ケーションセンター 講師		出席 (対面)
7	しのだ はるみ 篠田 春美	相模原市PTA連絡協議会		出席 (オンライン)
8	つつみ ちはる 堤 ちはる	相模女子大学栄養科学部 教授	副委員長	出席 (オンライン)
9	つのだ けん 角田 健	相模原市PTA連絡協議会		出席 (オンライン)
10	ふじわら まりこ 藤原 万里子	公募委員		出席 (対面)
11	まつたに まゆみ 松谷 まゆみ	公募委員		出席 (オンライン)